

## 誰もが一度は訪れる

# 「いやしの島」に



大島地区振興協議会顧問 水上忠夫

（宮城県気仙沼市・大島）

昭和7年生まれ。気仙沼高等学校併設中学校を卒業。漁業に従事。同52年気仙沼市議会議員当選、以後6期24年にわたり地方自治の発展に寄与。住民悲願の架橋実現に向け、20年以上架橋促進特別委員として活躍。平成12年、健康・保養を中心とした地域づくりを目指す「大島癒しの島づくり推進協議会」の設立に尽力。観光の通年化や交流人口増大、自然・文化を活用しながら大島ならではの魅力を体感できる活動を展開。平成17年から大島地区振興協議会会長、現任も同顧問。

大島は、名勝気仙沼湾口に浮かぶ周囲二四キロ、人口三〇〇〇（最盛期六〇〇〇）人の離島で、小規模ながら貝塚や館跡もあり、延喜式神名帳に見える式内社を有する由緒ある島だが、漁業依存で耕地は少なく、あらゆる面で本土との格差は比ぶべくもなかった。

昭和二八年、大島が離島振興法の第一次指定からはずれ、落胆の最中<sup>さなか</sup>にあつたとき、同年一月中旬、第一次から洩れた他の島々とともに、第二次指定に辛うじてすべり込み、地元新聞が「世紀の朗報」という見出しで大々的に報じ、住民が喜びに湧いたのがつい先日のような気がする。

時の大島村長は、ただちに「離島振興計画報告及び資料提供会」を開き、行政区長や各種団体をはじめ村民に対し、離島振興法の趣旨と向こう一〇ヶ年の事業計画の内容をたっぷりに説明した。以来、今日まで六〇年にわたり、離島振興法による島内整備の恩恵は計り知れない。同法の威力は、徐々に島内事情を一変させたのである。

ここで、わが島で離島振興法や全離島事務局の力を借りて、現在行っている事業を披瀝したい。

平成一二年四月、大島が国土庁（当時）からアイランドテラピートのモデル地区に指定された。以来、数々の島おこしの事業やイベントを実施している。たとえば、全離島のアドバイスによって、元日から一八四日目を「いやしの日」と定め、毎年島を挙げて、地区外からの一般市民も参加して史蹟探訪ウォーキングやレクダンス、郷土料理の提供など、観光と健康増進の一日を盛大に楽しんでいる。

先祖代々の悲願だった大島架橋も平成三〇年の竣工を目指しているが、事業費は離島振興による国費が三分の二、県費が三分の一で、やはり離島振興法あつてのものだろう。

しかし、島の本質は変わらない。「いやしの島」を標榜しつつ、かつて菅江眞澄や志賀重昂、柳田国男、宮本常一などの諸氏が足跡を残しているように、誰もが一度は訪れる魅力ある島づくりに余生を捧げたいと思っている。 ■

# 農業・漁業・観光の 連携を



農業／東京島しょ農業協同組合代表理事組合長 菊池勝男  
(東京都八丈町・八丈島)

昭和23年生まれ。同46年に帰島後、家族とともに家業の花卉園芸に従事。青年園芸家として独立し、後継者組織の拡充にも注力、30歳で八丈島農業協同組合の理事に。代表理事組合長に就任後、伊豆諸島の島々や小笠原との農協合併を実現し、現在の東京島しょ農業協同組合を設立、農産品の販路拡大と農業経営の多角化に尽力。この間、八丈町農業委員会会長などを歴任。平成20年に開校した八丈町担い手育成研修センターでは、フェニックス・ロペレニーなど花卉園芸生産を指導している。

浅学非才を省みず、先般の授賞式に出席し、恥ずかしながら栄に浴しました。私は昭和五九年に八丈島農業協同組合の専務理事となり、三年後には組合長に就任、それ以来、一時期を除いて二十余年にわたり組合長職を務めております。この間、わが島の農業振興を最大唯一の責務として、微力ながら取り組んでまいりました。また、時代の変遷の中、伊豆諸島・小笠原諸島の農協と合併を果たし、東京島しょ農業協同組合となり現在に至っております。

思い起こすと、四半世紀を越える間にはさまざまなこと遭遇しました。地震、台風、噴火、今回の伊豆大島における土石流災害など、自然の猛威によるものが念頭に浮かびます。この間を縫うようにして、島しょ地区の農業振興に取り組んできたつもりです。過疎化・高齢化などと相まって、東京都下の区市町村で三指に入る八丈島の農民生産額一位を目指して努力してきましたが、いまだ未達であり、願いと裏腹の無力感を噛み締めております。

また、八丈島の観葉植物に比較すれば生産額は低いものの、他の島々においても、たとえば利島の椿油、小笠原の熱帯果樹や大島・新島・神津島・三宅島のアシタバなど地域特性をもった独特の産品を有し、販売促進、新種苗導入などに取り組み、十余年間にわたってフェニックス・ロペレニー(親王椰子)のヨーロッパ輸出も行い、世界各国の花展で入賞を果たしたこともあります。

しかし、合併した農協の理想と現実の乖離は大きく、海を隔てての合併連衡は厳しく難しいことを痛感しております。島しょ地区町村や漁協合併の先駆けと叱咤されての合併でありましたが、その効果は町村漁協の合併がその組上から消えたことで理解していただけるものと思います。

私たちの島々においては、大東京都を控え、農業・漁業・観光の産業をうまく噛み合わせる相乗効果を生み出すことができれば、まだまだ智慧を絞る余地は残されていると、日夜苦悶の日々を数えながら微力を尽くしております。■

# 日本復帰四五年の故郷に思う

漁業／小笠原母島漁業協同組合代表理事組合長 佐々木幸美

(東京都小笠原村・母島)



国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績

昭和18年生まれ。小笠原諸島日本返還直後の同43年から父島で漁業に従事。同55年から母島に移り、平成7年小笠原母島漁業協同組合代表理事組合長に就任し、現在に至る。内地から若者を数多く受け入れて後継者育成に取り組みとともに、関東一円はもとより宮城県や沖縄県まで市場開拓に尽力。また小笠原村議会の副議長、議長など島の振興開発の要職を歴任。消防団活動へも積極的に参画し、海上保安署のない母島で海上保安業務を行うなど、地域振興と自治の確立に貢献している。

小笠原村では、一〇月に「小笠原諸島日本復帰四五周年記念式典」を太田国交大臣、猪瀬東京都知事（当時）の参列を得て盛大に開催、返還五〇周年に向けてさらに一歩踏み出すことができました。四月には、安倍総理大臣、公明党山口代表一行が来島、世界自然遺産登録後の観光産業の発展に、総理自ら期待する声が聞こえてまいりました。

振り返れば美濃部都政の中で、小笠原諸島返還をめぐり、在来（欧米系）島民の漁業者の立場の確保が大きな問題として提起されていきました。昭和四三年九月一〇日、盛大な見送りの中、神奈川県三浦三崎港を漁船四隻が故郷小笠原に向けて第一陣として出港しました。目指すは父島・二見港。当時、青春の真只中にいた私もその一員として参加したことが、四五年の月日を経て鮮明に甦ってまいります。父島到着後は、東京都より指定された場所（現小笠原漁協）に入植。一〇〇名近い帰島者は、在来島民の漁業者たちと一緒に漁業宿舍建設に毎日汗を流し、ムロアジ漁を細々と

営みながらクサヤ工場をはじめ、プレハブの冷凍庫や冷蔵庫を二年ほどの歳月を費やしながら、その基礎を築いたことが思い出されます。故郷での漁業再開と、復興へ向けての団結力は、いまでも誇りに思うところ です。

父島での漁協体制がようやく軌道に乗り始めて五年、故郷・母島での漁業再開の機運が高まり、当時無人島に近かった地で漁協建設がスタートしました。電気や水、交通アクセスのない島での開発は想像を絶するものであり、父島での戦いの比ではありませんでした。それでもパイオニア精神で青春をかけ、漁業振興に取り組んだ過ぎ去りし日、年月は少しも悔ゆることなく、いまでも続いております。

父島から五〇キロメートル離れた母島のハンディは相当なものがありますが、返還当時から振興、復興へと携わってこられたことに思いを重ね、すでに亡くなられた諸先輩方にお礼を述べたいと思います。今回の受賞に恥じないよう、今後も地域発展のために頑張る決意です。

■

# 愛読者に 支えられて六〇年



東京七島新聞社代表取締役社長 松本茂彦

昭和2年生まれ。明治大学卒。同27年『東京経済新聞』（現『東京七島新聞』・東京都島嶼町村会・同議長会指定広報紙、旬刊）を創刊。以来61年にわたり、東京諸島の行政・経済・住民生活、文化などの情報をつぶさに記録・報道。全国各地の産業振興や定住促進の現場も訪ねて紹介記事を掲載するなど、島と島、島と中央とを結び貴重な媒体として一度も休刊することなく現在に至っている。自ら執筆し続ける社説「奔流」は第333号から始まり、平成25年12月現在で1878回を数える。

離島振興法は一九五三（昭和二八）年、議員立法により制定されて以来、一〇年ごとに改正延長され、現行法は二〇一三（平成二五）年四月から本格施行されました。制定以来六〇年、思えば遠い道のりです。

季刊『しま』二二二一号の記事「離島振興法の改正について」によれば、今回の改正では就業促進、介護サービスの確保、人材の確保と育成などが振興の基本方針に追加され、ソフト対策として離島活性化交付金等事業計画が新たに策定されることとなり、産業、生活、防災など定住を支える施策も新しく追加されています。

このたび離島振興六〇周年にあたり、国土交通大臣から表彰状を頂戴いたしました。そもそも報道に携わる立場の者は無冠を是とし、遠慮するのが筋なのでしょうが、「離島振興に尽力」の文字を見て、ありがたく頂戴することにしたしました。

この晴れがましい表彰は、決して個人のものではなく、

たまたま代表して戴いたものです。六〇年もの間、小紙の発行を支えてくれたスタッフ、さらには愛読者の支援があつたからこそ今日があるわけで、その意味で読者の皆様こそ真の「離島振興の尽力者」であり、ともに喜びをわかち合いたいと思います。

離島振興法制定直前の一九五二（昭和二七）年と記憶しますが、網島正興、宇都宮徳馬、赤城宗徳、加藤勘十、大柴滋夫の諸先生方（衆院議員）が、巡視船「室戸」で伊豆諸島を文字通り超党派で視察され、同行取材したことを思い出します。正確な日時を確かめるため、海上保安庁に航海日誌の所在を尋ねましたが、「室戸」は一九七四（昭和四九）年に退役しており、日誌は処分されていました。

一行を乗せた「室戸」は、三宅島の大船戸湾（伊ヶ谷）に入って沖合一〇〇メートルに停泊、「はしけ近寄り」と放送。はしけで上陸した先生方が、玉石が敷かれた急坂を大汗で登って行きました。離振法誕生前の一齣です。■

# 交流と文化の島・

## 佐渡より



郷土史家 佐藤利夫

（新潟県佐渡市・佐渡島）

昭和6年生まれ。富山大学文学部卒業。同30年より佐渡島内の相川・佐渡・羽茂各高校教諭。退職後、佐渡の歴史と民俗を後世に伝えるための調査研究を継続。この間、相川町文化財調査審議会委員、新潟県文化財保護指導委員などを務める。新潟県史や各町村史・地域史の編纂にも携わり、著書に『明治生まれ』『くらしの四季』佐渡鳴誌（第1巻）『裂織』ほか多数。平成24年、文部科学大臣から地域文化功労者表彰を受ける。同20年から「しまの原景」を本誌に連載中。

離島とは近代になってからの言い方で、以前は海に浮かぶ飛石のような、回船が寄港する重要な場所であった。荷物を運びまわる回船は文明や文化を島々に伝達した。近代になり文明社会を形成すると、価値の高い文化を蓄積する島々がしだいに忘れ去られてしまった。

わたしは、このことを早くから気づいていたので、離島になってしまった島々に長い間に蓄積されてきた文化遺産研究の仕事を、教員を務めながら行ってきた。

佐渡は、自然景観はもちろんであるが、古い寺社や古文書が残され、伝統的宗教行事や習俗が継承されている。

早くから人びとの渡来があった島々のなかで、とくに人びとの交流が盛んであった島は佐渡であった。この佐渡に魅力を感じて、芸能集団「おんでこ座」(鬼太鼓)が結成され、全国から若者が集ってきて活動をはじめた。昭和四三年のことであった。ついで、南佐渡の小木で「日本海大学講座」が開かれた。この講座を企画し勧めた人が、山口県周防大

島の出身であり、離島振興の必要性を強調していた宮本常一先生（当時、武蔵野美術大学教授）であった。

先生の話された二、三の印象的な言葉を述べてみると、「佐渡は他の観光地と変わらない場所になってはならない」「佐渡の基礎産業を育成し、暮らしの糧がそこで得られないといけない」「住む人たちの可能性を広げられる島であり、一つの生活完結体の島になるように努力していくことが必要である」など、心に残る内容であった。いま佐渡の遺産になっている「おけさ柿」は、この示唆によって生まれた。島々は未開の自然ではなく、豊かで多様な文化を継承している。

もう傘寿を越えてしまったわたしは、これまで集めた古文書や民俗資料や写真、渡来の古陶磁などは後進の研究者によって生かしてほしいと思って佐渡市に寄贈した。わたしは今回の表彰を転機に、新たなスタート台に立っている。

# 島にしかない 価値ある資源を活かす



旅館業 中山勝比古  
(愛知県南知多町・日間賀島)

昭和24年生まれ。高校卒業後、家業の旅館を継ぎ40年以上にわたり観光振興に奔走。南知多町観光協会・日間賀島支部長（日間賀島観光協会長）、南知多町観光協会副会長を歴任。地元の名産を料理に活用し「たこの島」としてアピール、閑散期の誘客対策として「ぶぐの島」ブランドも確立。また、漁業者と連携して小中学生を対象とした自然体験漁業を企画、平成9年に27万人にまで落ち込んだ観光客数を同12年には34万人にまで回復させた。同15年には内閣府「観光力リスマ百選」に認定。

なぜ、島は過疎になるか？ 若者がいないからである。  
なぜ、若者がいないか？ それは「島」と「仕事」に、「夢」と「誇り」を持ってないからではないだろうか。

私は日間賀島で旅館を経営しているが、建物の外装工事の折りに、塗装の職人がいないことを知り、身近な漁業、自営業にも後継者が減少していることをあらためて実感した。まさしく、後継者の減少は島だけの問題ではなく、日本の社会問題でもある。

子どもの頃、ご飯粒を残すと、「目がつぶれる」「もったいない」と言われて育った。米をつくる農家を敬い、感謝することを祖父母や親は子どもに伝えていた。家を建ててくれる大工さんに、おやつを出して感謝している姿を見て育っている。現場で働く仕事が感謝され、尊敬されていた時代が身近にあって、誇りをもって生きている人が当たり前前にいた。いまの社会は、国も国民も所得を増やすために、一所懸命に頑張ってきたが、その結果、負のスパイラルを

起こしているようだ。

日間賀島は、観光と漁業が一緒になって島の収入が増え、後継者が多く残ったが、時代の早い変化に対応できない面もあり、過疎が進んでいる。それでも、島が好きだからと島に帰って、生きがいを見つけて働く若者たちもいる。

いま、人の生き方、社会そのものが変わる時が来ていると強く感じている。後継者問題を考える時、社会の価値観を変えなければ、解決しないと置いて仕方がない。そのためには、自分だけではなく、家族や地域の人など周りを考えて働く、社会に役に立つ働きを評価する世の中に戻すことが必要ではないだろうか。

現実には、自力ではできない島も多いが、島にはまだまだ思いやりの心、自立の精神が色濃く残っている。

いまだからこそ、島にしかない価値ある資源を活かして、島を元気にすることができると。子や孫の豊かな人生のために、「一緒にやろう」と若者に声をかけませんか？

## 人々の

# 心のつながりを次世代に

島の旅社推進協議会会長

山下伴郎



(三重県鳥羽市・答志島)

国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績

昭和16年生まれ。青年団の要職や答志町内会長を務め、全国で唯一残存する寢屋子制度の寢屋親も経験。人材育成や教育、伝統文化の保存継承にも貢献。島の自然や生活、歴史文化などをプログラムとして提供する「島の旅社推進協議会」の発足当初から活動に携わり、平成23年には会長に就任。鳥羽市議会議員（副議長・議長）などを歴任し、「答志コミュニティアリーナ」「答志島寢屋子交流の館」の整備や市営定期船最終便増便の実現など、住民生活の向上や地域間交流の活性化にも尽力。

全国で活動しておられます先輩諸氏の一人として、今回の離島振興六〇周年記念功労者表彰の栄に浴したことは、身に余る光栄でございました。事務や会場設営、進行と関係者の方々には深甚の謝意を表します。

私のいままでの活動を振り返り、今後の指針となればと考えます。

「本土並みの生活水準に離島住民の意識をいかにして高めるか、離島住民の意欲をいかにかき立てるか」を、青年当時から基本理念としてまいりました。青年たちが仕事に追われて自由のない時代、青年学級でフォークダンスや研修旅行、花嫁対策とさまざまな施策を取り入れ、旧態依然とした古い慣習に立ち向かったこともありましたが、当時の大人たちからは厳しい苦情もいただきましたが、青年団員の協力のおかげで定着できたことが一番の思い出です。若いうちの失敗は恐れず、失敗の中から次の対策を考える——いまの青年たちに特に必要なことではないかと思えます。

幸いにして私の答志町には、日本で唯一「寢屋子制度」

（若衆宿）が残り、一般の縦軸社会ではなく、横軸〓人々の心のつながりに強固なものがあります。町の活性化においては、この制度が育んだ数人のリーダーの下で活動がスピーディに進むという利点を活かすことにより、言葉でなく活動を主体とした事業が順調に進んできたように思います。

昔の人が考え、引き継がれてきた冠婚葬祭の儀式は、長い間の人々の経験による集大成であると考えますが、その上に立って現代社会の発展による知恵を加え、合意の上での進展を期待しております。このことこそが当町にとってもっとも大切なことではないかと考えています。物事の結果を見るとき、頂点の結論を論ずる前に、底辺でのさまざまな状況、意見の調整があることを忘れてはなりません。最後に、「私たちの仕事は、この郷土を次の世代へ伝えることである」——。当町漁協青壮年部員の言葉です。■

# 日本という 離島を守ろう



漁業／三重県漁業協同組合連合会代表理事会長 永富洋一  
(三重県鳥羽市・答志島)

昭和18年生まれ。同33年より答志島で船曳網漁に従事し、設備の近代化、効率化を牽引。平成2年答志漁協理事に就任以来、監事、専務理事を歴任、答志地区をばつち網漁・船曳網漁の中心地に成長させた。同16年には鳥羽磯部漁協の代表理事組合長を務め、同20年から三重県漁連代表理事会長、同25年からは全国漁業協同組合連合会副会長としてわが国の漁業振興にも尽力。東日本大震災では、漁業復興のために漁船50隻以上を被災地に贈るなど、中古漁船輸送プロジェクトを立ち上げた。

日本は、大小さまざまな六八五二の島々からなる国です。そこから本州・北海道・四国・九州・沖縄本島、いわゆる本土五島を除く六八四七島が島ということになります。

もつとも、小笠原諸島西之島沖で海底噴火により島が生まれました。噴火が収まり、完全な島になると思っています。噴火が収まり、完全な島になると思っています。噴火が収まり、完全な島になると思っています。

島々の存在により、国土面積では世界六〇数番目(約三八万平方キロ)の日本が、経済的排他水域面積では世界で六番目(四四七万平方キロメートル)となります。近年の調査で、この水域内にさまざまな海洋資源が大量に眠っていることが判明しましたが、最近は一方向的に線を引き、その区域内を許可なく飛行したら緊急措置を講じるなどと、国際法を無視した覇権を主張しはじめた国があります。

日本は、周りを海に囲まれた島国であり、海洋立国です。この列島には点々と約六〇〇もの漁業集落があり、そこに住む漁師たちは二〇万人を切っています。いま、石垣島

の漁業者は、尖閣諸島海域では危険が多く操業できない状態と聞いています。もしも尖閣諸島に港があり、人が住んでいたとしたら、このような状況になっていたでしょうか。日本人が、日本の海で操業できないとは情けない話です。領海を監視する海上保安庁の巡視船にわざと船をぶつけて来るような事件も発生しています。その昔には人間としての教えを広めた儒教の国、日本にもその教えは伝わっています。日本もいまはその教えにほど遠い国になりつつありますが、まだまだ常識は残っていると思います。

漁船に訓練を受けた軍人を乗船させている噂を聞くと、なるほどと思われる。このような行為を許していたら次々と攻められて、行く末は、日本列島は太古の昔には大陸に繋がっていた、と言ってくる気がしてなりません。

このままでは、日本の領域はどんどん減少していくことでしょう。離島に住民が安心して住み続けられるように、国の責務として抜本的な対策を講じるべきだと思います。

## 住民一体となった

# 離島振興の半世紀

農業／南あわじ市議員 中村三千雄

(兵庫県南あわじ市・淡路島)



国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績

昭和11年兵庫県淡路島（旧灘村）生まれ。南淡町議会議長、南あわじ市議会議長などを歴任、10期38年わたり地域振興に尽力。とくに交通、教育文化、医療などの諸問題について、沼島総合センターや小中学校の整備、灘診療所の開設、海底送水管敷設、沼島ヘリポートの建設などに貢献。平成元年にミカンやビワ、電照キク栽培からバラ専業への転換と大規模化に挑戦、作業の省力化や出荷方法の改良、品質向上に取り組み。同13年より県農業経営士会長として農業者育成にも寄与。

昭和二九年一〇月、兵庫県三原郡沼島村（当時）が離島振興法に指定され、その翌年、沼島村と灘村（淡路島）を含めた六町村の合併により南淡町が誕生したのであります。

当時の灘村は、淡路島の陸の孤島と言われ、人の交流や物資の輸送は、海岸に沿って人が行き交えるほどの細い道路と、沼島く灘く洲本と沼島・灘く福良の航路によって営まれていました。

私も当時、淡路島内の高校へ進学しましたが、親元を離れて寮生活する以外の道はありませんでした。帰郷するにも一ヶ月に一度くらい、唯一の交通手段である航路は一日一便という生活を三年間送ったわけです。

卒業後は、水田がないために果樹と花卉農業に専念しながら、同志らとともに青年団活動に参加し、灘青年団長を務め、昭和三十七年から四年間は南淡町青年団長として町の活性化、とりわけ灘地域の振興を図るため、住民一体となって離島振興指定にむけての運動に参画し、沼島に後れるこ

と一〇年、昭和三九年七月九日に灘地域が指定されたのであります。

灘に生まれ育ち、地域に愛着を持って振興のために先頭に立ち、公民館長や灘連合自治会長の後は、昭和五〇年に推されて南淡町議会議員選に立候補、三八歳で当選させていただきました。以来八期連続務めてまいりました。その間、離島出身ということもあり、離島対策特別委員長を二期、また町議会議長も務めさせていただきました。

その後、平成の合併により、平成一七年一月、人口五万人を超える南あわじ市が誕生するや、初代市議会議長を拜命。同二五年一〇月の市発足三期目の選挙で、旧町時代を含め一一回目の議員活動も現職として取り組んでおります。

地域振興を振り返っての五〇年は、じつに感慨深いものがあります。このたび灘地域が指定解除になりましたが、残された沼島の声を優先し、これからも市の発展を願いながら、住民の声を行政に反映したいと思っております。■

# 六次産業化の チャレンジジャーとして



株式会社吉崎工務店代表取締役社長 吉崎博章  
(島根県隠岐の島町・島後)

昭和22年生まれ。千葉工業大学卒業。前全国離島振興推進員連絡委員会会長。同60年、若手経営者らと隠岐青年会議所を設立、初代会長に就任。平成5年、隠岐全体の企業と行政が一体となって雇用対策に取り組み隠岐地区雇用促進協議会を設立。同18年隠岐空港利用促進協議会理事長としてジェット化に向けた利用促進を展開。同19年には隠岐スモールビジネス協議会を設立し、原木栽培のシイタケをはじめ、県の認証制度を通じて地場産品ブランド化、販路拡大などにも尽力している。

未だ道なかばで結果を出していないのに、思わぬ国土交通省大臣表彰を受け、申し訳ないような恥ずかしい気持ちで一杯です。

長期にわたり低迷が続いている建設業の傍ら、隠岐の素材を活かし、雇用を確保し、外貨を稼ぐために原木シイタケ栽培を平成一九年から本格的に始めました。その後、遊休ハウスを使用したパプリカ、ミディトマトの栽培を始め、それぞれ安全で美味しい島根の県産品認証を受けました。

また、同じような気持ちで特産品づくりに取り組んでいる仲間たちとともに「隠岐スモールビジネス協議会」を立ち上げ、自社のものだけでなく、隠岐の地域ブランドを構築する活動を始めました。物流コストを少しでも下げるため、窓口の一本化も進めています。まだまだ思うようにはなっていない。

シイタケ栽培そのものも軌道に乗らず、四苦八苦しています。原木一本あたりの収穫量が計画数値に届いておらず、

その改善を早急にしなければなりません。

いま、付加価値を高めるため、政府が進めている六次産業化へチャレンジしようとしています。島で獲れた水産物を鮮度の良い状態で大都市の消費者へ提供する。大量に獲れた安価な水産物を農産品とコラボして、付加価値をつけて販売を進めなければなりません。幸いなことに、隠岐の島町の遊休施設再利用の企画書が採用され、平成二五年一月から施設を借りることができ、試作品づくりに取り組んでいます。

素材の調達はまだ順調ではなく、一次産業から二次・三次産業へ参入するにはリスクも大きいですが、それぞれの過程で専門家の指導を受け、それも一回や二回でなく、数年に渡っておつき合いたただき、商品開発、販売へとつながりたいと思います。今後も老体にムチ打ちながら、前へ前へと進みますので、皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いたします。

# 島全体で盛り上げたい

## 「走り神輿」

漁業／笠岡市漁業協同組合代表理事組合長 井本 龍雄



(岡山県笠岡市・真鍋島)

国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績  
昭和24年生まれ。笠岡地区漁業連絡協議会会長。平成10年、八幡祭り保存会を発足。初代会長として基礎を築くとともに、真鍋島走り神輿の笠岡市無形民俗文化財の指定に向けて尽力。岡山県漁業協同組合連合会理事、岡山県海面利用協議会委員及び岡山海区漁業調整委員会委員を歴任し、地域水産業の振興にも貢献。また昭和52年から37年余にわたり、笠岡市消防団真鍋島分団員として地域防災に努め、平成7年真鍋島分団副分団長就任後は団員の指導に励むなど、活躍は多岐にわたる。

僕らの時代の「走り神輿」は、それは激しかったです。

地区の代表として八人の担ぎ手が選ばれ、島内の三地区同士が競争するわけですから。その時期が近づいてきたら気持ちが高ぶって、当時は大阪におりましたが、いろいろ口実をつけて仕事を休んで帰っていました。

ところが、島も高齢化が進んで費用が賄いきれなくなり、担ぎ手も足りなくなりました。一度止める話になりました。平成一〇年のことです。その時点で、やはり伝統ある行事をなくしてはいかんと、若い者が二〇人くらい集まって、同年に走り神輿の保存会ができました。そこから会長職を一二年半やりました。

会ができてからは、祭りの費用は寄付金を募り、担ぎ手の賄いも個人の家ではなしに、会館でまとめておこなうようにして、集まったお金で間に合うようにしました。

祭りは以前、秋にやっていたのですが、それでは勤めの人になかなか仕事を休めないということで、五月の連休に移

して、担ぎ手も確保できるようにしました。始めた頃は、どうしても若い衆が島にいないので、市役所に頼んだり、息子たちの同僚に来てもらったりしていました。その頃は島の担ぎ手は半分くらいでした。時期を変更することには一部反対の声もあり、最初は苦労しました。しかし、担ぎ手がいないとできませんから、押し切りました。いまは、島から出て都会で働いておられる方なども帰って来ることができ、観光客の方々にも喜んでもらっています。担ぎ手も島出身者が増えています。

豊漁の祭りである「走り神輿」がなくなったら、真鍋島は灯が消えたようになるのではないかとという心配があります。真鍋は漁業の島ですから、これだけは続けなくてはと思います。四年前に会長を自分から降りて、次の人に渡しましたが、これからは保存会だけではなしに島全体が協力して、この祭りを盛り上げてほしいと思っています。（談）

# いざ帰りなん、 日本一豊かな島へ



農業／広島ゆたか農業協同組合代表理事組合長 横本正樹  
(広島県大崎上島町・大崎上島)

昭和24年生まれ。東京農工大学卒業後、帰農。食べていける農業を目指し、ブルーベリーを先駆的に導入。同61年に農事組合法人神峯園を設立、農家への栽培普及や加工品の研究、販路拡大に取り組み、アントシアニン含有量日本一のトップブランドを築く。大崎上島農協代表理事組合長、日本ブルーベリー協会副会長などを歴任し、平成24年広島ゆたか農協代表理事組合長就任。町の障害者福祉施設にて「福祉を言い訳にしない製品づくり」による障害者の地位向上と自立支援などにも尽力。

昭和四八年三月、大学卒業と同時に島へ帰って来たのは二三歳の時でした。

それまで一五年東京に住んでいて、そのまま勤め人になって大都会の中に埋没し、定年を迎えるという選択肢は私の中にはなかったのです。では、島へ帰って何をするのか。漠然とはありますが、この島を農業を通して「日本一豊かな島」にしたいと思っていました。

父親の仕事の都合で、島を出たのは五歳の時でしたが、小学校五年生の時からほぼ毎年夏休み（時には春休みや冬休みにも）には帰っていたので、土地勘がありましたし、何より東京という大都会との落差が強く私を引きつけていました。帰って来た時、張り替えた障子に陶淵明の「とうえんめい 帰去来ききよらい」の辞ことばなどを書いて、それを眺めながら一人悦よろこに入っていたものです。

もちろんいざ農業を始めてみれば、とてもそんな悠長な気持ちでは続けていくことはできないとすぐにわかりまし

たが、それでもいままなおこの詩は私の中に基調低音として鳴り続けています。

以来四〇年余りが経過して、まだまだ来し方を振り返る余裕はなく、目の前のこととこれからの事業展開、そして農協の組合長になってしまいましたので、三つの島の農業振興を農協を通してどのように実現していくか、という仕事に忙殺されています。しかしある意味、若い頃に抱いた夢の実現に生涯をかけることができる、という点では幸せであるのかも知れません。

いまはまだ全力疾走の途中ですが、ゴールに着いた時、秀吉が辞世の句で示した心境に到達できるのかなと思っています。

露と落ち 露と消えにし我が身かな

浪速のことも夢のまた夢

# 本土から島への 渡船通学を実現

野島地域自治会連合会会長

佐子吾郎



(山口県防府市・野島)

国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績

昭和13年生まれ。平成2年自治会長、同6年野島地域自治会連合会長などを歴任、活性化に取り組み。とくに子どもの健全育成と小中学校の存続に注力、住民や行政に学校存続を訴える。同13年度、市内他校区からの渡船通学を受け入れる「茜島シーサイドスクール事業」が始まり、「渡船通学をする児童生徒を支援する会（現茜島シーサイドスクールを支援する会）」を組織し会長に就任。同24年度までに80名以上を受け入れる。ほかに防府市環境衛生推進協議会副会長などを務める。

市内本土側の校区からの通学生を受け入れる「茜島シーサイドスクール事業」は平成一三年から始まりましたが、渡船通学のアイデアは昭和五七年頃から考えていました。

私は三九歳の時、「子ども育成会」の会長を務め、その後PTA会長を小学校で四年、中学校で二年務めました。小学校のPTA会長の時分から、「子どもがおらんようになって学校がなくなったら野島は一気に過疎の島になる、将来の活性化は学校の存続があってこそなされる」と、つねに皆さんにお話ししていました。

この制度を立ち上げるにあたって、自治会や漁協、PTAなど、当時島内に一一あった役割や性格の異なる団体をまとめて、住民の意志として行政にお願いしました。市の教育長や教育委員会などと三年弱にわたって議論を重ね、事業の開始となったわけです。皆さんの意見をまとめるのには苦勞もりましたが、いったん開校してからは上手いき、県の教育長も高く評価してくれました。

この事業以外にも、さまざまな活動に関わってきました。野島地域自治会連合会長に就任して、今年で二〇年になります。これまでの活動を振り返って、「人づくり」ができたことが一番の誇りです。島内清掃や港湾周辺の整備、花を植えたりする奉仕活動の中で、お互いのコミュニケーションが図られ、地域の結束が高まりました。野島の人は皆さん、島を自分たちの手でつくる、守っていくという気持ちでおります。

次の世代は、その人なりの個性を出したコミュニケーションを取りをして、それを島の皆さんがサポートすればいいと思います。個性を大切に、皆が地域を重んじ、創意工夫して、つくったものは皆で守ってほしい。

このたびの表彰は、島の方々が私を信じて二〇年間やらせていただいたからだと思います。地域の方と行政の援助によって受賞させていただいたという思いです。あつという間の二〇年でした。

(談)

# 若い後継者が 多く育つ島に



漁業／前伊島町会長 岡本新三郎  
(徳島県阿南市・伊島)

昭和14年生まれ。同46年伊島町会委員、副会長を経て平成元年会長に就任。同25年の退任までの間、コミュニティプラントや砂防ダムの建設、簡易水道施設の設置、町会運営の介護サービス事業発足など、住環境の向上に尽力。また、県指定の絶滅危惧種で伊島の固有種イシマササユリの減少を危惧し、本土住民と協働した生育しやすい環境づくりや、高等学校と連携したバイオテクノロジーによる育成などを現在も継続するなど、伊島の発展と振興、相互交流の促進に寄与されている。

伊島町内の自治会組織運営に委員として参加して以来、四二年間（うち四年間休職）、委員として一八年、町会長として二〇年間、町会の運営に携わってまいりました。自治会組織とはいえ、活動、仕事の内容は多岐にわたっており、日常生活から伝統文化継承、自然環境保護、伊島ササユリ保護、神社仏閣護持、諸施設の維持管理など、自己の生活を守りながらほとんど無報酬でこれらのことをこなすのは大変なものがあります。他の委員の手助けをいただきながら、どうにかここまで務めることができました。

このたび、はからずも大臣表彰をいただくことについて、身にあまる光栄でありがたく感謝をいたしております。

この四〇年あまりをふり返って見ますと、いわゆる箱物といわれる施設——小・中学校の改築、体育館、集会所の建設、上水道の施設の整備にともない格段の上質の水道水の供給が出来るようになったこと、汲み取り式のし尿処理から阿南市内初の下水処理施設が完成し、女性の重労働が

解消できたことなど、諸施策を講じてまいりました。

主産業である漁業においても漁協とタイアップして生産性の向上と経済の安定を図るべく、漁場の造成、種苗の生産放流、漁船の近代化など着々と取り組んでまいりました。少子、高齢化が言われる現代社会において、幸い伊島町は若い後継者が多く育つて、休眠しておりました青年団も復活し、現在一七名の団員を数えるにいたっております。それにともない、若者向けの定住促進住宅を市にお願いして、平成二六年度に建設が決定されたところです。

在任中は住民の協力はもろろんのこと、各方面とくに阿南市ご当局のあたたかいご理解とご協力、ご指導があったからこそ、これだけの仕事ができ、無事にその責務を努め上げることができたものと感謝を申し上げます。

後進の諸君には、いまの生活に満足することなく、より豊かな島づくりを目指して、関係機関とも連携を深めながらますます精進してくれることを期待しております。 ■

# 住民が支え合う 福祉の島を目指して

特定非営利活動法人「石の里広島」会長

横瀬 實

(香川県丸亀市・広島)



昭和13年生まれ。同37年、第8回全国離島青年会議に島を代表して出席するなど、若い頃より地域振興に努める。平成10年、広島・小手島・手島の住民で構成する「ふれ愛の町ひろしまをつくる会」および広島地区連合自治会会長に就任。同13年、島の福祉を担うNPO法人「石の里広島」を設立、現在まで会長を務めるなど、住民生活の向上に奔走。大学と連携して高齢者や帰省住民の意向を聞き、住民自らが環境整備を行っていくためのまちづくり計画を策定するなど、現在も第一線で活躍。

国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績

私たちの島には小学校が二校ありましたが、子育て中の若者たちが島外に移住して児童数が少なくなり、平成八年四月に統合して一校になりました。高齢化がすすむ状況の中、廃校舎を島の住民が活用できる施設に切り替えられな  
いか市に要望していたところ、一年をかけて改築がなされ、同一年に市内の福祉法人が運営するデイサービスセンターが誕生、高齢者がよくこんで利用しておりました。

ところが、一二年度限りで事業が終了することになってしまい、島内九集落の自治会長と一年をかけて検討した結果、特定非営利活動法人（NPO）を組織すれば島の住民で運営を続けられることが判明。同一年一〇月、住民がともに助け合い、支え合って福祉活動をすすめるがら島づくりをしてゆこうと、全世帯全住民を会員とする「石の里広島」を設立しました（同一年二月八日法人認定）。

同一年四月より、丸亀市からデイサービス生きがい活動通所支援事業の委託を受け、運営をはじめました。四名の

島内在住者を雇用、住民の就労の場ともなっております。その後、独自活動として小学生の通学送迎事業や、同一年より独居老人への週一回の配食事業も実施。島内七集落間を結ぶコミュニティバスも、一年をかけて住民の合意を得、デイサービス送迎のバスを利用した自家用有償旅客運送（過疎地自家用運送）事業を国土交通省四国運輸局に登録。同二年二月より周回運行をはじめ、住民からも大変よろこばれています。

同二三年からは、隣りの島にある「手島自然教育センター」（手島小中学校跡）の管理運営も市より指定管理を受け、今年で三年になります。

これまで「住民でできることは住民です」との想いで事業を行ってきました。これからは、一〇年、二〇年先を見据え、市からの委託事業ばかりではなく、島に定住してくれる人たちを受け入れる事業が大切ではないかと考えています。

# 島の元気は 文化の振興と交流から

藤原建設有限会社役員／直島町文化協会会長 松田武重

(香川県直島町・直島)



昭和4年生まれ。岡山県第二岡山商業学校卒業後、建築事務所を経て藤原建設入社。同63年直島町文化協会会長に就任。芸能大会や文化祭の開催、島外交流や視察研修、直島女文楽の保存・発展に貢献。平成15年、007(ダブルオーセブン)が活躍する小説に直島が登場したことを機に、007資料整備運営委員会会長として「赤い刺青の男」記念館の設立や映画誘致にも活躍。直島フイオンズクラブ会長時代にはホテル復活を計画、飼育や放流を実施するなど、環境保全でも尽力。

直島は宇野―高松航路に面した東西二キロ、南北五キロの小さな島ですが、天領だった江戸時代には歌舞伎や人形浄瑠璃などの公演が許され、芸能が盛んでした。

城跡には間口一二間、奥行き八間の舞台があり、廻り舞台なども豪華でした。島の有志による一座があり、歌舞伎などが上演されると中国・四国はもとより遠くは阪神方面より訪れる船で港は埋めつくされ、島の人が見学できるのは最終日だけだったと伝えられるほどの繁昌ぶりでした。

また、大正三年には三菱金属が銅の製煉所を建設、一時は従業員が一〇〇〇人で島の人口も七〇〇〇人になりましたが、現在は製造工程も機械化されて三〇〇人程度となり、町の人口も三三〇〇人に減少し、現在に至っています。

私も岡山より昭和三五年に移住し、製煉所の仕事をしておりました。同六三年、直島町文化協会の会長に就任した時、会員は詩吟同好会をはじめ二八団体ありました。これを契機に発表会を催そうと思ひ、春には芸能大会、秋には

文化祭「展示会」を開催したところ、会員は元気になり、町民の方々に大変喜ばれました。これらの催しは現在も続けております。他町村との交流も計画し、いまでは高松市香川町文化協会と交流、お互いの芸能を芸能大会で発表しており、勉強になります。

直島伝統の女文楽は女ばかりで一座を組み、岡山県内でも求められれば上演していましたが、香川県三野町で演じた時、文化庁の人から「人形を遣うのは上手だが、テープ演奏ではなく三味線語りが入って文楽というのです」と注意され、早速姫路より師匠を招き、三味線三名、語り二名で練習を重ね、いまでは一人前に成長しています。

いま直島では、ベネッセコーポレーションが島内南部で有名な作家アート作品を展示し、瀬戸内海九つの島と高松や宇野を含めて「瀬戸内国際芸術祭」を開催、見学者が大勢つめかけており、有名になりました。私たち文化協会も、いろいろなお手伝いをしていくところです。 ■

# 再び子どもを産み育てられる島に

農業／松山離島振興協会会長

田中政利

(愛媛県松山市・怒和島)



国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績

昭和21年生まれ。愛媛大学卒業後、農業研修生として渡米。帰国後、温州ミカンや伊予柑栽培の傍ら、ゴカイ養殖に取り組む。愛媛県国際農村青年協議会会長、怒和島漁業組合副会長を歴任し、農漁業振興に尽力。平成18年、市内有人9島に団結を呼びかけ、松山離島振興協会を設立。同22年の松山島博覧会「しまはく」開催や、同23年住民が主体的に島づくりに取り組むための「まつやま里島（まつやま）リズム」ネットワークを設立に携わるなど、地域間交流や産業振興を牽引している。

二〇一三年は、私にとって特別な年になった。〇六年四月に発足した松山離島振興協会が八年目の活動期を迎え、その取り組みが国土交通省の「全国地域づくり表彰」で全国八三団体中の六団体に選ばれた。同じく私が会長を務めるまつやま里島ツーリズム連絡協議会は、農林水産省の「豊かなむらづくり表彰」で全国四位級の農林水産大臣賞を頂戴した。個人も離島振興功労ということで、おこがましくも国土交通大臣賞を拝受した次第であり、トリプル受賞の栄に浴した私は、八日間のうちに三度も大いなる喜びに浸り、気持ちも新たにいくつかのプランを描いたり、忽那諸島の未来に思いを馳せたりしている。

二〇〇五年一月、二市一町の合併でわが故郷・中島町はその名を失い、島の住民は松山市民となった。五〇万人を超える松山市民の一員となり、福祉の向上ときめ細やかな住民サービスを実感する一方で、島を出る若い家族が増え、小学校は休校や廃校を余儀なくされ、多くの島で子どもた

ちの笑い声が消えた。このことがどれほど寂しく、島びとの気持ちを萎えさせるものか、私はこの八年間で嫌というほど味わった。子どもの声がいかに周囲を元気づけ、明るくさせているかということの裏返しだ。

私たちの目標は、島を再び子どもを産み育てられる環境へと戻すことだ。子育て環境の整備は避けて通れぬ命題だが、必ずや達成させる自信がある。少々言い過ぎだが、近頃少しばかり自信が湧いてきたのだ。昨年来付き合ってきた「丸の内朝大学」のわが娘のごとき女の子たちは、島の魅力と島びとの心根を称え、子どもができたら絶対に島留学させると言ってくれる。私も島の「子育て力」をことあるごとに実感し、そのことを何より誇りに思うこの頃だ。もうじき、『瀬戸内しまのわ2014』という愛媛・広島両県をまたぐ大イベントが始まる。松山島博覧会を経験した私たちが手本となるこの好機に、いま一度わが忽那諸島の底力を試してみようと思う。

■

# 過疎地 医療体制の充実を



医師／宇和島市国民健康保険戸島診療所所長 木村隆徳  
(愛媛県宇和島市・戸島)

昭和5年愛媛県八幡浜市生まれ。九州大学医学部卒業。アメリカの医療機関に20年近く勤務、同国の家庭医学専門医に日本人として初めて認定。日本電電公社松山通信病院、松山ホテル病院副院長などを経て、昭和62年1月、地元の高い要望を受けて2年以上医師が不在となっていた戸島診療所に赴任。以来、四半世紀以上にわたり隣島の嘉島診療所の医師も兼任（週3回の出張診療）しながらプライマリ・ケアの先覚者としてその実践に尽力、両島の地域総合医療を支え続ける。

シオンと読む漢字の名前が気になっていたが、尋ねたのはその子が中学生になってからだ。案の定、聖書の語句を意識して名づけましたと、母親は静かに語った。その意味は、心の清い人々が住む場所。

「聖書でさえ現代語の翻訳が出版されているのに、お経は……」とつぶやくと、何ヶ月か後にずっしりと重い新刊書が届けて下さった方がいた。その年に初めて出版された日蓮聖人の御書（創価学会）の全英訳版だった。黙々と探索する本気さに頭が下がり、感謝した。

宇和島の二つの小島の診療に二七年間滞在ならしめたのは、良識ある根強いリーダーシップに支えられた素朴な住民の熱意が、行政の協力をも引き出すことになったからであろう。異分子にとくに過敏な日本の社会で、内外からの「風評」を切り抜けられたのは、米国で家庭医学の濃厚丁寧な研修と、その専門医試験を経た日本人第一号という心底の自負、たぶん意地も働いたかもしれない。

卒後のインターンシップは、佐世保沖にある島の病院だった。島とそこに住む人々への尊敬は自然だった。直後の三年余の米国での研修の往復は貨客船で、文字通り太平な夏の大海原と、真冬の荒れ狂う大海を体験させてくれた。今日までわが国では、自治医大や各県への医学部（校）創設、医学部入学定員の増加、学部内に総合診療科の創設、自治体独自の奨学金制度拡充、医学部と自治体との毎年の合同対策協議会などが実施されてきたが、過疎地医療に満足すべき効果を発揮できていないのは明白であろう。

幸い、わが国でも新世代の看護師には見識技量ともに優秀者が多い。従来医師一辺倒から、法整備を含む、より安定してcost-effectiveな（費用効果の大きな）補完体制の創設に向かうべき時が到来しているのではないか。保守（医師）の牙城のアメリカでさえ、とくにnurse practitioner（看護師と医師の中間に位置する医療従事者）制度を採用して効果をあげてきている。

# 島の子、 自信を胸に巣立て

大島地区コミュニティ運営協議会会長

梶原 實



(福岡県宗像市・大島)

国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績

昭和11年生まれ。西南学院大学卒業。同38年に大島中学校赴任以来、3世代にわたる大島住民との親交を深める。平成10年、大島村教育長就任を機に大島に移住。地域との繋がりを生かし、教育問題をはじめ漁業に関する相談、青少年や女性、高齢者の活動支援など、島の振興に幅広く貢献。小中連携にいち早く取り組み、宗像市が実施している小中一貫教育の基礎を築く。現在、大島地区コミュニティ運営協議会会長として、鎌倉時代から続く大島七夕まつりなど地域行事の維持にも尽力。

大島の人口は二〇〇〇人を超えていたこともあったが、いまは七三二人。漁業が基幹産業で、最近の魚価低落、燃料高騰など、厳しい漁業経営が人口減の一因になっている。島には高校がないため、進学するには島を出るしかない。

島を離れる「一五の春」までに自信をつけさせたいという思いから、子どもたちの「出場所づくり」に取り組んできた。七年前、中学校で音楽の先生がミュージカルを教えたのがきっかけだった。子どもたちは島の文化祭や七夕祭り、みあれ祭、全島運動会、敬老会、学習発表会などに出て歌った。コミュニティ運営協議会の活動として、子どもたちに本物を見せたいと、毎年小中学生を福岡市の博多座に連れて行き、ミュージカルを鑑賞させて音響効果や照明など、文化施設にふれさせてもいる。宗像地区中学校文化連盟発表会、全国小中一貫教育サミット宗像大会でも、大ホールで見事な声量と演技を披露し高い評価を受けた。

平成一〇年に大島村教育長に就任し、全国の離島の学校

を訪ねて歩いた時、先生の出張は二泊三日のはずが、海が荒れて一週間帰れず、中学校の先生が代わりに小学校で教えていた。そこで、「小中連携教育」を始めた。別々にあった校舎を新しく一体化させ、小中が同居して活動ができるようにした。

大島出身者が遺言で多額の寄付をしていたが、多目的ホールが完成、島の人や学校も活用している。人々の島を愛する気持ちが胸にしみる。「子どもの出場所」にお年寄りが集っては、成長ぶりに声援を送っている。

島の人々は互いに助け合って生きている。若い人たちが島外からお嫁さんを迎え、子育てサロンも盛況である。小学生三四人、中学生一二人だが、〇歳から六歳までが四〇人。将来が楽しみである。島の活性化は漁業が中心だが、自然や施設を生かし、島外からの観光客誘致に取り組んでいる。多くのイベント開催、癒しの島づくりを目指すためにも、人材育成が大きな課題である。

# 皇室へも献上した 伝統の赤米



漁師／赤米頭受行事保存会代表 主藤公敏  
(長崎県対馬市・対馬島)

昭和25年生まれ。18歳の時、1300年前にはすでに行われていた五穀豊穡などを祈る神事「豆穀の赤米行事」(平成14年国選択無形民俗文化財)を引き受ける「頭仲間(とうなかま)」を父親から引き継ぐ。平成18年からはただ一人の神事継承者として赤米の文化を後世に残すべく尽力。同25年11月、宮中での新嘗祭(にいませまつり)に、対馬からは昭和12年に佐須村の米と鶏知(けいち)村の粟を献上以来、76年ぶりに豆穀の赤米が献上された。現在はシイラ漬け漁船船長として漁業に従事。

赤米神事を務める頭仲間(とうなかま)は、昭和三〇年代には二〇軒前後ありましたが、年々少なくなつて、平成一七年には二軒、そして翌一八年にはとうとう私たち夫婦二人になりました。

二人して、赤米の田んぼもつくらなくてはいけない、年間一〇何回ある行事もしないといけない、と、そこに苦心しました。二人だけではできない作業には、人を雇ったりもしています。

先祖代々、この神事を受け継いで、守ってきていることに誇りを感じていますし、妻が私についてきてくれることに感謝しています。神事の時の直会(なおらい)の準備やなにやら、妻の協力なしにはとうていできません。

赤米は今年、天皇陛下への献上米に選ばれました。対馬では七六年ぶりのことだそうです。平成二五年一〇月三〇日、妻と対馬市長の三人で御所に参りました。間近で両陛下に拝謁し、感激して涙が出ました。両陛下が入つて来られた時は、何か後光(こうこう)といいますが、輝いている感じがいた

しました。妻もそう言っていました。四五年間頑張ってきました甲斐があり、本当によかったと思っております。

今後、神事をどのように続けていくかですが、私自身頑張っていける間は、伝統的な形で守っていきたくと考えております。この神事は、頭仲間が交代でおこなってきたもので、社社の行事ではありません。なんとかその形式を続けていきたいと思えます。

私たちの住む豆穀(まめこ)は農業離れが多くて、若い人たちもみな外に出てしまう。そういう中で先日、神事の際に頭仲間の人たち四、五名に来ていただいて、息子でも娘でも子どもたちを帰して、この神事を守っていくということをお話し合いました。私にも息子が三人います。三男は家において、漁業や農業を手伝っていますが、やはり家は長男が継ぐという考えがここにはまだありますので、できれば長男に戻ってきてもらい、赤米神事を伝えていってほしいと思っております。

(談)

# ピンチを チャンスと捉える



玄海酒造株式会社代表取締役会長 山内賢明

(長崎県杵岐市・杵岐島)

国土交通大臣表彰受賞者(一般住民)の功績

昭和7年生まれ。明治大学卒業後、会社勤務を経て同58年、家業の焼酎蔵元(玄海酒造)を引き継ぐ。同60年の社長就任後は、同社を島内の代表的メーカーに育て上げ、杵岐の焼酎づくりに牽引。焼酎資料館を運営し、品質国際評価機関モンドセレクションでは最高金賞も受賞。杵岐焼酎の普及とブランド化にも尽力。島内産大麦の作付け拡大にも取り組み、産業振興にも貢献。近年は市立一支国博物館の杵岐学講座講師として、歴史や風土に重点を置いた講演や執筆活動なども行っている。

私は昭和五八年、兄の急死で東京から杵岐に帰り家業を継いだ。当時、杵岐には一二もの蔵元があり、販売競争が激しかった。島内需要だけでは、ある蔵元の販売量が増えれば他社は減る。そこで私は販路を長崎市内に求めた。

ところが昭和六〇年、長崎県の指導のもとに六蔵が合併し、一二蔵が七蔵体制となった。県は合併した蔵元を強力に応援したので長崎市場を断念し、知人を頼って首都圏に進出を図った。福岡と東京の行き来は飛行機を利用してはいたが、昭和六〇年八月一二日の日航ジャンボ機墜落もあって新幹線に変更、広島や兵庫、大阪、京都、名古屋、静岡など沿線で途中下車して卸問屋の開拓にも力を入れた。

昭和六三年、英国の元首相サッチャーの申し入れで日本の酒税法が大幅改正された。それに伴い、「ゴールド杵岐35度」(樽樽貯蔵)のモデルチェンジが必要になったが、結果的にはそれが幸いして、いまではその商品「杵岐スーパードールド22度」が会社の主力商品に成長している。

昭和六二年八月三十一日、杵岐に一〇〇年に一度という被害をもたらした台風一二号では、会社の主要棟が全壊したが、これを機に工場の新設、増・改築を行った。

家業の発展は杵岐の活性化につながると考え、ひたすら社業に邁進していたところ、業界の皆様から杵岐酒造組合会長(平成二二年)、杵岐焼酎飼料工場設立理事長(同一七年)、長崎県酒造組合会長(同二〇年)、日本酒造組合中央会焼酎事業需要開発部会長(同)などに推された。酒類業界発展にも努め、恩返しができればと思っている。

家業を継いでから辛いことが多かったが、ピンチをチャンスと捉えて前向きに対処してきたのがよかったと思う。

他の島々と同じく、杵岐も人口減少や少子高齢化、産業の衰退が著しいが、海に囲まれており、自給自足の歴史がある。これからは博多から玄界灘をフェリーで二時間という環境を有効に活用、ありのままの自然を見直して、生活がしっかりと確立した島を見てもらいたい。

# 地元にも根づく医師の開業を求む



医師／田坂医院院長 田坂章吾  
(長崎県新上五島町・中通島)

昭和5年生まれ。長崎大学医学部卒業。奈留町厚生病院、国立小浜療養所を経て同38年、無医地区となった故郷から要望を受けて帰郷し、田坂医院を開業。同47年、同町青方を開院。五島医師会理事、上五島文化協会の初代会長、上五島町教育委員長などを務める。平成24年旭日雙光章受賞。現在も新上五島町で唯一の開業医として、遠方の地区や高齢者世帯などへの往診も積極的に実施。地域住民の精神的な支えとなっている。著書に『走馬燈わが80年の足跡』(平成20年、非売品)。

昭和三七年、私は長崎の大手電機会社の診療所に勤務し、午後三時ころより長崎大学の第一内科で勉強をしていた。

ある日、故郷の父より分厚い手紙が届いた。読んでみると診療所の先生が長崎に移転し無医村になって住民が困っている、できるだけ早く帰って開業してくれとのことだった。

大学を卒業し、内科学教室に入局して以来、五島の僻地診療所や雲仙の国立小浜結核療養所へ派遣され、やっといま大学で本格的な内科学に触れられるようになって、これからうんと勉強できると喜んでいた矢先のことだった。

いずれは五島に帰って開業する予定ではあったが、あと二、三年後のことと思っていた。しかし、一日でも早くと父からの矢の催促である。医局での送別会では、「医局に残って勉強し、医学を極めるのも医師の道であろうが、郷里に帰って住民のために尽くすのも医師の役目である」と大言壮語して、昭和三八年四月、自宅を改造して開業した。開業してみると大変であった。本業の内科ばかりでなく、

ほとんど全科の患者さんが来るのである。あるとき、産婦が出血多量で困っていると往診の依頼があった。内科の医局にいたころ、先輩からたとえ内科医であっても往診カバンには子宮収縮剤と出血止めの注射を用意しておくように言われていた。あの先輩はこのようなことを経験していたのだろうか。そのおかげですぐ注射して事なきを得た。

一番の苦労は夜の往診であった。いまでは山の中の一軒家のそばまで立派な舗装道路ができたが、当時は山の上まで何キロメートルも重い往診カバンを持って懐中電灯を照らしながら登って行った。道に迷うこともあった。

今年で八三歳となったが、この地に一昔前まで一〇人以上もいた開業医がただ一人となり、寂しいことである。立派な上五島病院があつて多くの病人が助かっているが、開業医が一人もいなくなると困る人がいることも確かである。早くどなたかこの地に根づく医師が開業してくださり、私は安心して医院を閉じたいと思う今日のごろである。■

## 比類なき伝統行事の 継承に向けて



ヘトマト保存会  
（長崎県五島市・福江島）

豊作、大漁、子孫繁栄を祈願する小正月行事「下崎山のヘトマト」は、奉納相撲や羽根突き、綱引き、玉蹴り、大草履奉納といった年占を一度に行う貴重な民俗行事として知られる。国の重要無形民俗文化財に指定される前年の昭和61年、地区全体で継承を図る目的で「ヘトマト保存会」を設立。以来、町内会、青年団、消防団を中心に、崎山中学校の生徒を積極的に参加させるなど、将来の担い手育成や認知度向上、観光客の増加、地域間交流の推進を含め行事の保存継承に尽力。

このたび国土交通大臣表彰を頂戴いたしましたことは、ヘトマト保存会と下崎山町民にとって大変光栄なことです。ヘトマトの行事は、早朝に崎山地区の祈願寺である大通寺にて、祭りを司る御幣持ち役の山内家当主（世襲）がつつ

くつた御幣と、新嫁が使用する羽子板を祈禱していただくことから始まります。午後一時頃、白浜神社において、保育園児、小中学生、青年団、消防団による宮相撲を行い、午後三時頃、御幣を奉持した山内氏を先頭に町役員が鉦（時の鉦）を鳴らしながら白浜海岸に向かいます。海岸近くの路上では、羽根つきが始まるまでの間、青年消防団員がヘグラ（竈のスス）を見物人の顔につけて回ります。逃げ回る者、つけられた者の顔で、囁す声があがり、その熱気のまま、着飾った新嫁が酒樽の上に乗る、御幣の合図で、羽根突きを行ないます。次に、締め込み姿の男子中学生、青年団、消防団員による柄がついた玉の取り合い、綱引きを行います。その後、海岸から御幣を先頭に山城神社（牛の神）

への大草履の奉納巡行。道中では、逃げ惑う未婚の女性を次々に捕まえては大草履の上ののせ、担ぎ上げ、何度も揺さぶると嬌声があがります。

ヘトマトは、当初、山内家と青年団で執行行っていました。高度経済成長期に団員の減少で行事に支障をきたし、昭和四五年に消防団の参加を得て継承できました。過疎化・少子化にともない、平成八年に男子中学生及び中学校教師の協力を得て伝統行事を継続させています。また、生活環境の変化にもなつて、ヘグラの確保が困難となり、イカスミや墨汁などの代替品を使用。評判が悪く、いまでは青年団の努力で竈のススを確保しています。一月一六日の開催日は、時勢の変化に合わせて平成一九年から一月の第三日曜日に変更しています。

今回の表彰を機会に、伝統行事を守るため、先人たちの努力を尊重し、未長く行事を継承できるように地域一丸となつて努めたいと思います。

# 数百年来の 製鉄技術を受け継ぐ



鍛冶師／牧瀬種子鉄製作所三七代目 牧瀬義文  
(鹿児島県西之表市・種子島)

昭和18年生まれ。中学校卒業後、父親の鍛冶師・義美氏に師事。義美氏が亡くなられた後、刀鍛冶だった牧瀬家の37代目として家業を継承、以後、50年以上にわたって鍛冶業に従事。現在は、極軟鋼に高炭素鋼を鍛接するという日本刀の製作方法を取り入れた伝統的鍛冶技術を用い、鹿児島県伝統工芸品として指定を受けた種子鉄と種子包丁をおもに製造。いま、ほぼ全工程を手づくりで製作しているのは牧瀬家だけとなっており、鍛冶技術の伝承にも尽力されている。

私は、中学卒業後この道に入り、五五年ほど経ちました。これまでやってきて苦労したことは、やはり技術的なことです。作業は、一工程、一工程、集中力をもってやらないと全体がよくならない。とくに、仕上げと焼きを入れる段階には気をつかいます。また、気温や体の調子など日によって違いますから、気持ちの面の充実が一番大切です。気持ちがおだやかでなければいい仕事もできません。

技術は、父から受け継ぐというよりは、見て取って覚えしました。昔は絶対に教えなかった。そうすると自分で考える力というものが据えつけられるでしょう。職人にはいろいろな仕事が多い込みます。そこで応用が利かなければ、職人とはいえないですからね。

父は、仕事の面では厳しかった。仕事の最中、ふざけて鼻歌など唄ったりするだけで怒られました。いま私は七〇歳、父が亡くなったのは七二歳、最近やっと、父の技術を少し越えたのでは、という気持ちがあります。まだまだ

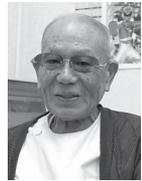
足りないところがあります。職人の修行は死ぬまでですから、技術は進歩させていかないといけません。現状でいいとなると衰えます。牧瀬家は私で三七代目になりますが、先祖から伝わってきた技術を伝承して、少しでも越えてきたということに誇りもっています。

いま、技を教えている弟子が一人います。これから先は、彼が技術を伝えていくと思います。現在は八〇パーセント、もう一息です。あと二、三年はかかるでしょう。それまでは元気でありたいと思いますが、こればかりはわかりません。

技術だけでなく、いい加減な仕事をしないよう、自分に厳しくすることを伝えておきたい。楽をしようとしたら、いい仕事はできません。職人は、小さな作業にも気を配って、製品を使う人の気持ちにならないと。そういう心持ちをなくしてしまつては、職人とはいえません。(談)

# 若い頭脳と体力で 離島の振興を

国土交通大臣表彰受賞者（一般住民）の功績



医師 柏 修  
（鹿児島県中種子町・種子島）

大正13年鹿児島県種子島生まれ。九州大学医学部卒業。同大学小児科学教室勤務、宮崎県日南市での病院勤務と医院開業を経て昭和46年、小児科専門医のいかなかった郷里の中種子町で柏医院を開業。以来、町内の保育所や幼稚園、小・中・高等学校の校医として児童・生徒の健康や体力向上にも貢献し、熊毛地区医師会理事・議長も歴任。平成14年、医療功労受賞。現在は同町の田上診療所に小児科医として勤務されている。

私の育った風土では、師匠も先輩たちも、「それが悪いことではなければ、たいていのことは断るな」という気風があった。あまりにへり下った謙遜は傲慢に値するとの教えに従って、今回の離島功労者表彰も素直にお受けすることにした。

しかし、いざ受賞してみると、果たして離島振興に何を貢献したのだろうかと忸怩たるものがあつた。

一九七〇年代の熊毛（種子島・屋久島）の医療は、各科のスタッフが揃ってそれなりに充実した陣容であつた。いまでは後継者探しに難渋している産婦人科も、当時は五、六軒あつたように思う。そのなかで、島内唯一の小児科医として雑踏する診療にあけくれ、北に南にはほぼ全島内をカバーできたことが評価されたものと納得することにしていく。

時の流れとともに社会生活も変化するのは当然であろう。医療も例外ではない。

少子高齢化の影響を、産科と小児科はもろに受けた。かつて、走り廻る溢れるような子どもたちで賑わっていた夏休みの小児科など、いまでは見る影もない。

一昔前の子どもたちは、みな貧乏で乏しい時代であつたが、子どもさんの腕白どもはイキイキと逞しく生きていた。学校閉鎖、統併合、複式授業、学級減などによる児童生徒数の激減は目に余るものがある。にもかかわらず校庭だけは昔ながらの広さに残っているのを見ると、しみじみと過疎化、時代の落差を考えさせられる。

長寿高齢化は時代の変遷とともに、ある程度許容できるものがある。しかし、あの寒々とした校庭に再び子どもたちの喧騒、嬌声は甦ってくるであろうか。

若い頭脳と体力こそ国力の恢復、離島振興の活力の原点と想っている。

# 「世界の奄美」を 目指して



マルエーグループ会長 有村栄男  
(鹿児島県奄美市・奄美大島)

大正10年鹿児島県与論島生まれ。13歳の時からグループ創業者で叔父の有村治峯氏のもとで直接教育を受け、のちに治峯氏と養子縁組。海軍より復員後、有村商事に入社、昭和26年専務取締役、平成2年代表取締役社長、同12年取締役会長を経て、マルエーグループ会長に。運輸業をはじめ、石油事業、黒糖焼酎製造・酒販事業、製糖業、繊維造業、ホテル業など幅広い分野で産業振興と雇用の創出に尽力。社会経済の発展に対するその功績は、奄美群島のみならず南西諸島全体に及ぶ。

私は与論島の生まれです。一三歳で奄美大島に出て、昭和一四年から兵役で離れましたが、それ以外はずっと奄美を中心に活動してきました。先の大戦では海軍の落下傘部隊に属し、東南アジアで戦ったわずかな生き残りです。

昭和二一年に復員すると、名瀬は焼け野原でした。終戦直後に家内を亡くして落胆していた親父（マルエーグループ創業者の有村治峯氏、一九〇〇―二〇〇〇）を励ましながら、二人三脚でやってきました。親父の跡をすべて継いだわけではなく、親父が計画した事業は親父が、私が考えたものは私の責任で、自由に仕事をさせてくれました。

これまで石油やお米の卸、紬や黒糖の製造、観光などさまざまな事業に携わってきましたが、もっとも苦労したのは海運です。最初は一五トン、二〇トンのポンポン船を自分で操縦し、各島間を回って沖縄まで生活物資を運んだりもしました。いまでは八〇〇〇トンクラスのフェリーを通していています。

これからの奄美は、一つにまとまるべきと考えます。たとえば観光計画をみてもそれぞれの行政がバラバラで、全体が結束していない。まず奄美大島の中が一つになり、理想は奄美群島がみな一緒になることです。

私ももう九〇歳を越えました。足が不自由で車椅子ですが、最近、東南アジアのリゾート地を見ってきました。とくに島々、たとえばベトナムのフーコック島、マレーシアのランカウイ島、インドネシアのバリ島、中国の海南島、すべて世界的な観光島になっています。奄美の自然や景観は雄大であり、こうした島々に決して劣りません。交通の隘路が解決されたら世界の奄美になるはずですし、そこまでもっていきたいと思います。

先頃、地元の南海日日新聞社から南海文化賞をいただき、このたび国土交通大臣表彰を頂戴しました。とても隠居などしておられません。生ある限り努力しなければと思っています。

(談)

# 知恵と苦労を偲び、 いまを知る



与論民俗村相談役 菊 千代

（鹿児島県与論町・与論島）

昭和2年生まれ。与論村立青年学校卒業。同38年頃から私財を投じて民具の収集をはじめ、同41年与論民具館（現与論民俗村）設立。同55年、芭蕉布織りの伝承を目的とした与論芭蕉布保存会を結成。与論町の文化財保護審議会委員を務めるなど、島の民俗や伝統文化の保存継承に貢献。著書に『与論方言集』『与論のしまがたり』、共著に1万5700余りの語句について詳細な解説を加えた『与論方言辞典』（平成17年、武蔵野書院）などがある。現在も3世代同居で与論島に在住。

与論島は、沖縄本島の北隣りに位置する鹿児島県最南端の島です。周囲二三キロの小さな島ですが、「東洋の海に浮かぶ一個の真珠」と形容されるほど、とても海がきれいです。

昭和三〇年代から始まった高度経済成長期に、住民の暮らしは急激に変わりました。生活道具の多くが電化製品やプラスチック製品などに変わり、親や祖先がつくり、使ってきた民具がゴミ扱いされ、捨てられました。私は、島の子どもたちが歴史を学ぶときの教材になれば良いと考え、民具収集を始めました。そして、物が消えると言葉が消えることに気づき、与論方言も書き残すことにしました。

変人扱いされた時期もありましたが、一向に気になりませんでした。家族や住民の協力もあって、民具の収蔵数も増えていきました。昭和四一年四月、復元した小さな茅葺き民家の脇に、「与論民具館」と看板を立てたときの嬉しさはいまも忘れられません。その後も民具の収蔵を増やしつつ、『与論方言辞典』や『民話集』なども発行しました。

苦勞したのは、増える一方の民具の置き場所でした。生活に余裕がなく、収蔵庫が建てられないので、移築した茅葺き民家の中だけでなく、住居の押し入れや床下にも押し込まざるを得ない状況が長く続きました。方言記録も、自分の日常語だから書けるだろうと安易に考えていたのが無限の作業とも思われてきて、辞典を完成させるまで何度あきらめかけたことでしょうか。台風は毎年のように襲来し、茅葺き屋根の修理や葺き替えには現在も苦勞しています。

昭和五八年に息子に経営を引き継ぎ、翌年には「与論民俗村」に名称を変更して、運営の仕方も来館者が見学だけでなく、いろいろな体験学習ができるようになりました。

そして平成二三年三月には、収蔵民具のうち一〇九四点が国の「登録有形民俗文化財」に登録されました。

未来は過去・現在の延長です。よりよい社会にするためにも、与論民俗村は人々が「祖先の知恵と苦勞を偲び、いまを知る」場所でありたいと考えています。

# 夢に向かつて 積極的な挑戦を

野球評論家(元プロ野球選手)



村田兆治

昭和24年広島県三原市(旧本郷町)生まれ。福山電波工業高校から東京オリオンズ(現千葉ロッテマリーンズ)に入団。独特のマサカリ投法でプロ通算215勝をあげる。現役引退後、平成4年の長崎県生月島を皮切りに、日頃プロの技に触れる機会の乏しい子どもたちを対象とした少年野球教室などを主催。以後、自身のライフワークとして離島を巡り、離島甲子園の創設を提唱、同20年から「国土交通大臣杯全国離島交流中学生野球大会」として継続開催。自ら名誉会長を務める。

平成二〇年に、「全国離島交流中学生野球大会」として始まった通称「離島甲子園」は、今年度は長崎県壱岐島でおこなわれ、六回目を無事に終えることができました。

私は、平成二年に現役引退後、翌年、新潟県の粟島を訪れたことをきっかけとして離島訪問を始め、これまでに五〇以上の島を回りました。同じ島に何回も行ったことがあるので、延べ一〇〇回近くは離島を訪問しています。一年の大半、島にいたこともありました。

島の子どもたちには、野球を通して夢と希望とチャレンジする勇気を伝えてきました。夢に向かっていくなかで、最終的には何が大事かというと、本人がアピールしていくということだと思います。島の子どもたちは、わりとのんびりしたところもあって、また、島からみて本土との間には大きな壁があるようです。そうした環境のなかで、いい意味の逃げ場がない競い合いの場としてこの大会があつて、いろいろな課題を乗り越えていくなかで、子どもたちは心身とも

に成長していきます。また、島の代表として活躍することによって、チームワークや誇りも生まれてきます。われわれもその姿を見て感動しますし、喜びも感じます。

子どもたちにとって、離島甲子園での頑張りが、中学卒業後もそれぞれの道で夢を実現していくための糧になっていると思います。高校進学後も野球を続け、実際に甲子園に出場した子たちもいます。それに、離島甲子園は島同士の交流にも一役買っています。これまで島同士の交流は、ありそうでなかったようです。

私もだんだん歳をとっていきますから、大会を続けていくには苦勞もありますが、子どもたちの成長やレベルアップに向けてのサポートが、私の社会貢献だと思っています。島を取り巻く状況は厳しいですが、島を回っていて、島が本当に好きになりました。子どもたちには、新しいことに積極的にチャレンジして、これからの歴史をつくっていったほしいと思います。

(談)

## その他の表彰者・団体の功績

### ■阿曾義明（医師／新潟県佐渡市・佐渡島）

大正一四年生まれ。東京慈恵会医科大学卒業。昭和三一年、佐渡畑野地区の阿曾医院に勤務、同四五年院長就任。平成一九年まで半世紀以上にわたり、開業医として離島医療の向上に尽力。同地区は山間部に多くの民家が点在、道路事情がよくなかった時代は積雪での通行止めの中、十数キロの山道を徒歩や自転車で行診。昭和三六年から平成二三年まで畑野小学校、後山小学校、小倉小学校、畑野中学校の学校医、昭和四一年から平成二〇年まで養護老人ホーム待鶴荘の嘱託医、昭和五四年から平成二〇年まで軽費養護老人ホームときわ荘の嘱託医として、それぞれ児童生徒や入所者の健康管理に献身的に取り組み、学校教育や高齢者福祉の向上にも貢献。昭和五九年から平成一八年まで佐渡医師会の役員を務められた。

### ■秦 雅信（医師／愛媛県上島町・弓削島）

大正一五年生まれ。熊本大学卒業。昭和三二年、魚島村国民健康保険診療所に勤務。同三六年、恒常的な医師不足に悩む弓削島で秦医院を開業、現在に至るまで離島地域の医療・保健・福祉などの増進に献身的に尽力。また、昭和四〇年から四六年間にわたり、国民健康保険運営協議会委

員として同保険事業の安定と発展に寄与し、保健施設事業・老人保健事業の推進にも貢献。その間、弓削・佐島の保育所・小学校の校医として、予防接種や検診など子どもたちの健康維持に力を注ぐ一方、寝たきりなどにより医療機関へ行けない方々への巡回診療を実施するなど、住民の健康保持・増進、保健福祉行政推進に多大な貢献を果たされた。平成八年には第二回回医療功労賞、同一〇年には国民健康保険関係功績者厚生大臣表彰を受けられている。

### ■一般社団法人 日本損害保険協会

国内損害保険会社二六社で組織する同協会（会長二宮雅也日本興亜損保社長）は、防災・交通安全思想の普及と社会貢献の一環として、昭和五七年度から今日まで全国の離島関係市町村に対して消防施設の寄贈事業を実施。対象は、離島振興関係四法の指定離島のうち原則として人口一〇〇人以上の島としていたが、昭和六二年から五〇人以上に拡大、平成二年に一島または一市町村に一台寄贈という当初目標を達成。同二五年度まで三二年間の総寄贈台数は、小型動力ポンプ（B3級）五一七台、全自動小型動力ポンプ付軽消防自動車一六三台、非常用浄水発電照明装置積載兼用軽消防自動車九台の合計六八九台。東日本大震災後（平成二三年度）、宮城県の被災離島四市町へ優先的に機材を寄贈。その後も被災地枠を設けて寄贈を継続されている。■